

# 環黄海を巡る九州支部国際交流の歩み YSRIM(環黄海建築環境エネルギー国際交流会議)の 発展的解消と今後の展望

伊藤 一 秀 九州大学 正会員

キーワード：環黄海(Yellow Sea Rim)、国際交流会議(International Exchange Meeting)、建築環境とエネルギー(Built Environment and Energy)、目的・経緯・展望(Aim, Details and Prospects)

空気調和・衛生工学会九州支部では、上海市制冷学会(中国)、韓国建築親環境設備学会嶺南支部(韓国)と共同で、2006年1月よりYSRIM(環黄海建築環境エネルギー国際交流会議)を継続実施してきたが、2014年2月に9回目の会議を終え、開始から10年の節目を迎えたこともあり、YSRIMを発展的解消し、新たな国際交流のステージへとシフトするための準備を開始した。

本稿では、これまでのYSRIMを中心とした九州支部の国際交流の実績を簡単に紹介しながら、今後の展望について報告する。

## はじめに

福岡は東京—中国上海のほぼ中間距離に位置しており、福岡空港を利用すれば上海や韓国ソウルは日帰り旅行圏である。また、福岡—韓国釜山は飛行機に加えて高速船も就航しており、(船でも)3時間以内で移動が可能である。九州はその歴史や立地上、環黄海を巡る東アジアの国々との結びつきが深く、九州地域の国際交流といえば韓国、中国を中心とする東アジア地域との連携が中心にある。現在に至る九州と東アジア各国との経済や産業面での密接な交流の実績は、ここで紙面を割いてまで論じる必要はないと思われるが、学術交流という視点においても九州と東アジア各国との結びつきは強い。

本稿では空気調和・衛生工学会九州支部と東アジア各国、特に韓国・中国との交流を中心に、これまでの九州支部50年の国際交流の歩みを振り返るとともに、今後の展開を考察してみようと思う。

さまざまな形の国際交流があるが、すべては個人の信頼関係から始まるのであろう。2014年に50周年を迎えた九州支部では、これまでほぼ10年ごとに活動の総括を行いながら記念誌を作成しているが、これらの資料、特に30周年記念誌や40周年記念誌を熟読しながら九州支部の国際交流に関する情報を探してみると、(特に40周年を迎えるまでは)組織としての仕組み作りや活動に関する成果は皆無といってよく、個人ベースで手弁当にて細々と、しか

し綿々と信頼関係構築に向けて努力してきた事実が確認できる。筆者である伊藤は東京から九州に移動して8年になるが、このような草の根の交流による信頼関係の醸成と個人個人の努力の積み重ねが九州支部国際交流の本質であると強く感じる。このように少しずつ小さな石を積み上げていくような先達の努力のうえに現在の我々があることに、まずは感謝したい。

個人の力量に頼っていた九州支部の国際交流は、支部創立40周年記念事業を一つのメルクマールとして大きく展開する。九州支部創立40周年記念事業(2004年11月)の一環として、“21世紀のアジアの建築設備”と題した国際フォーラムが開催されているが、ここでは、韓国釜山・東亜大学の李政宰先生、中国上海・同済大学の張旭先生、北九州市立大学(当時)の相楽典泰先生による講演が行われ、特に東アジア地域の建築に関連する環境・エネルギー問題が熱く議論されたとの記録が残っている。当時九州支部では、“アジアに向けた国際交流活動の推進”を支部活動の大きな柱の一つにあげており、支部創立40周年を機に組織としての具体的なアクションをということで、この国際フォーラムを切っ掛けに、さらには東京大学松尾研究室OBのネットワークを駆使する形で、新たな国際交流会議の設立が検討された。これが、環黄海建築環境エネルギー国際交流会議(The Yellow Sea Rim International Exchange Meeting on Building Environment and Energy、通称YSRIM)と呼ばれる九州支部独特の国際交流の仕掛けである。最終的には、空気調和・衛生工学会九州支部、上海市制冷学会(中国)、大韓設備工学会釜山・蔚山・慶南支部(韓国)が共同主催する形で、毎年持ち回りで開催してきた国際交流会議である。後述するが、“学術会議”や“国際会議”ではなく、“国際交流会議”という名称である点が、実は重要な意味を持つ。

九州支部の国際交流といえばこのYSRIMの活動と同義である、と思って間違いないほどに、ディープでコアな活動である。



## 1. YSRIM の成り立ちと実情

環黄海建築環境エネルギー国際交流会議 YSRIM の設立に関する詳細な説明と活動の中間報告は、その中心メンバーであった赤司泰義先生(元九州大学教授で、現在は東京大学教授)による既報<sup>1),2)</sup>に詳しいので、ここでは初めて YSRIM の名を耳にする方のために簡単な概要のみ紹介したいと思う。YSRIM とは、前述のとおり日中韓 3 箇国の環黄海都市部を中心として、継続的に Face to Face のミーティングを開催することによって、建築における環境とエネルギーの研究・実務に関する情報交換を促進し、各国相互の技術開発と省エネルギー施策の推進に寄与すること、を第一の目的としている。多くのメガ・シティを抱え、さまざまな環境問題、エネルギー問題に直面しているアジアをリードすべき日中韓 3 箇国の大学教員、研究者、実務家、学生が 1 箇所に集まり、都市や建築の環境エネルギーに関する研究成果や技術開発の状況、施策・制度の動向などを情報交換する場、いわゆる“サロン”の創出を目指しているのである。加えて、グローバル化を強く意識した教育システムへの転換が求められる現状に対し、英語で自分の研究を発表し、英語で議論し、英語で自国文化を語り、英語で他国文化を理解するという最初の機会を学生に与える、という教育的な側面もある。英語を母国語としない日中韓の仲間の集まりは、学生にとって初めて経験する国際会議としては敷居も高くなく、ちょうどよいレベルである。

このような背景もあり、YSRIM の論文集は、通常の国際会議プロシーディングスのように投稿された論文の査読は行わず、情報交換という目的のもとで既発表論文の内容を書式だけ整えて投稿することも認めている(この点では、YSRIM の梗概集にはさまざまなレベルの論文が玉石混淆しているのが実情であり、真にオリジナルで未発表の論文を投稿したとしても、この梗概集を引用して原著論文とか学術論文であると主張するのはちょっと拙い状況にある。筆者も初めての参加の際には、真面目に新しく論文を仕上げて投稿したので、ちょっと吃驚した記憶があり、これは多少残念)。

この情報交換の場としての国際サロンを、空気調和・衛生工学会九州支部、上海市制冷学会(中国)、大韓設備工学会釜山・蔚山・慶南支部(韓国)の学会支部レベルでのフォーマルな催し物というレベルまで力業で昇華させた点に、YSRIM の特徴があろう。

YSRIM そのものは学会支部間のフォーマルな活動であるが、その実態と推進力は、実のところ、東京大学松尾研究室 OB の結束力に依存するところが大きい。九州支部で YSRIM 立ち上げのイニシアチブを取り、その後の継続

に中心的な役割を果たしたのが赤司泰義先生であり、そのカウンターパートである中国・上海の譚洪衛先生(同済大学教授)、韓国・釜山の李政宰先生(東亜大学教授)は、ともに東大松尾研 OB、同窓であり、譚先生ならびに李先生はそれぞれの国の学会ですでに主導的な立場にあった。

同窓の友情と信頼関係に基づく集まりを、学会レベルのフォーマルな会議として再構築し、10 年もの長期にわたって維持させる努力は並大抵のものではない。特に九州支部はアカデミック分野の人材枯渇が激しく、この YSRIM の活動は、実質、赤司先生ただ一人のリーダーの力で推進されてきたのが実情である。しかしながら、10 年という歳月は、一つの世代交代のチームにも相当し、毎年の変化は小さくとも 10 年分の積分値としての変化量は小さくない。特に中国では途中から譚先生が実質的な学会活動から一歩身を引かれ、YSRIM 担当が別の教授となったが、この後任の先生が譚先生とまったく同じモチベーションで活動することが容易ではないこと、は容易に推察できる。事実、譚先生が YSRIM に参加されなくなってから、中国のプレゼンスは、質量ともに明らかに低下した。他の国際会議では中国勢の躍進著しい現状と比すれば、YSRIM の状況は特異な例であろう。我が九州支部でも 2013 年に赤司先生が東大に異動されるという(九州の環境・設備系にとっての)激震があり、YSRIM 推進の駆動力を失うことになった。唯一、韓国だけが高いモチベーションを維持することができたのは、李先生が最後まで現役でリーダーシップを発揮し続けた、という事実他にない。

## 2. 第 5 回から第 9 回までの YSRIM

YSRIM の実績を紹介するため、第 1 回から第 9 回までの論文数や参加者数を表-1 に纏めて示す。YSRIM のプログラムは、その趣旨が情報交換の場であることを強く意識して作成されており、その構成は第 1 回から第 9 回まで不変である。YSRIM のプログラムは主に、オーラルセッションとポスターセッションで構成される。オーラルセッションは原則として個別研究発表を対象とするが、ポスターセッションは個別の研究発表に加えて、支部紹介、研究室紹介、企業紹介などから構成されている。ポスターセッションで各研究室の研究内容紹介や企業の設計業績や施工例といった実績の紹介を推奨した理由は、偏に研究室や企業の PR の場を設けることで情報交換を促進し、さまざまな形での協調の可能性を探ることにある。

当然、会議のオフィシャル言語は英語であり、発表や原稿もすべて英語による。さて、赤司先生の既報<sup>1),2)</sup>では第 1 回から第 4 回までの開催概要が詳細に報告されているので、ここでは第 5 回以



表-1 YSRIM 全9回分の実績

## YSRIM 2006 第1回

開催年月日 : 平成 18 年 1 月 18 日(水)~19 日(木)  
 開催場所 : 九州大学西新プラザ  
 口頭発表 : 22 題  
 ポスター発表 : 18 題  
 参加者 : 145 名

## YSRIM 2007 第2回

開催年月日 : 平成 19 年 1 月 23 日(火)~25 日(木)  
 開催場所 : Shanghai Science Hall(中国・上海)  
 口頭発表 : 25 題(日本から 10 題発表)  
 ポスター発表 : 47 題(日本から 13 題発表)  
 参加者 : 89 名(日本 : 29 名, 韓国 : 30 名, 中国 : 30 名)

## YSRIM 2008 第3回

開催年月日 : 平成 20 年 1 月 28 日(月)~30 日(水)  
 開催場所 : HAEUNDAE GRAND HOTEL(韓国・釜山)  
 口頭発表 : 15 題(日本から 5 題発表)  
 ポスター発表 : 25 題(日本から 8 題発表)  
 参加者 : 76 名(日本 : 16 名, 韓国 : 40 名, 中国 : 20 名)

## YSRIM 2009 第4回

開催年月日 : 平成 21 年 1 月 29 日(木)~30 日(金)  
 開催場所 : メルパルク熊本(熊本市)  
 口頭発表 : 15 題(日本から 5 題発表)  
 ポスター発表 : 25 題(日本から 8 題発表)  
 参加者 : 102 名(日本 : 65 名, 韓国 : 24 名, 中国 : 13 名)

## YSRIM 2010 第5回

開催年月日 : 平成 22 年 2 月 27 日(土)~3 月 1 日(月)  
 開催場所 : The Conference Hall of Yi Fu Building, at Tongji University(中国上海)  
 口頭発表 : 15 題(日本から 5 題発表)  
 ポスター発表 : 19 題(日本から 8 題発表)  
 参加者 : 105 名(日本 : 27 名, 韓国 : 32 名, 中国 : 46 名)

## YSRIM 2011 第6回

開催年月日 : 平成 23 年 1 月 21 日(金)~1 月 23 日(日)  
 開催場所 : Haeundae Centum Hotel(韓国釜山)  
 口頭発表 : 19 題(日本から 5 題発表)  
 ポスター発表 : 32 題(日本から 18 題発表)  
 参加者 : 97 名(日本 : 32 名, 韓国 : 40 名, 中国 : 25 名)

## YSRIM 2012 第7回

開催年月日 : 平成 24 年 2 月 3 日(金)~2 月 5 日(日)  
 開催場所 : AIM(アジア太平洋インポートマート)(北九州)  
 口頭発表 : 16 題(日本から 5 題発表)  
 ポスター発表 : 21 題(日本から 10 題発表)  
 参加者 : 101 名(日本 : 53 名, 韓国 : 39 名, 中国 : 9 名)

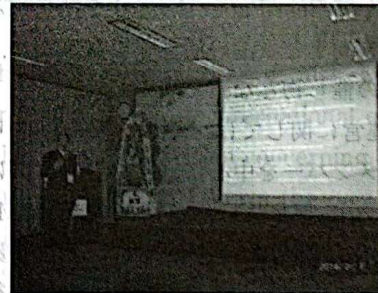
## YSRIM 2013 第8回

開催年月日 : 平成 25 年 1 月 26 日(土)~1 月 28 日(月)  
 開催場所 : 蘇州飯店(中国蘇州)  
 口頭発表 : 16 題(日本から 7 題発表)  
 ポスター発表 : 36 題(日本から 13 題発表)  
 参加者 : 82 名(日本 : 22 名, 韓国 : 20 名, 中国 : 40 名)



## YSRIM 2014 第9回

開催年月日 : 平成 26 年 2 月 16 日(日)~2 月 18 日(火)  
 開催場所 : Haeundae Centum Hotel(韓国釜山)  
 口頭発表 : 17 題(日本から 6 題発表)  
 ポスター発表 : 28 題(日本から 12 題発表)  
 参加者 : 82 名(日本 : 25 名, 韓国 66 名, 中国 : 7 名)





降の状況を簡潔に紹介したいと思う。

第5回から第9回までのYSRIMも前4回と同様に、基本的にグループ参加型の会議スタイルを維持している。基本的には日中韓の各支部が一つのグループ単位になっており、参加者や発表論文の取りまとめまでこのグループ単位で調整が行われる。会議開催のホスト支部になった場合にも、このグループ単位で仕事を進めることになるが、当然、大学教員だけですべてが処理できるわけもなく、結果として学生が国際会議開催のイロハ、裏方業務を経験するよい機会にもなったといえる。

各回の参加者数は、各支部単位の参加グループである程度の調整が行われるため、毎回100名前後となる。口頭発表数とポスター発表数は基本的に各支部に均等に割り当てられるので、発表者の所属としては日本、韓国、中国ではほぼ同数となる。しかしながら、実際の発表者の国籍は中国が最大、その次に韓国、日本国籍の発表者は最小となり、この傾向は口頭発表の場合に特に顕著になる。これは、日本からの発表者に留学生が多いという現実を反映しているのであるが、毎回深く考えさせられる事実でもあった。我が国では大学教育のグローバル化が叫ばれており、グローバル人材の育成が至上命題になっているが、これは、誰を対象として誰のために(もしくはどこの国益のために)行うものなのであろうか。また、第8回には研究発表を行った学生を対象としてBest Paper Awardを授与することで、モチベーション向上と議論の活性化を試みたが、残念ながらこの回のみの催し物となった。

YSRIMの運営に関しては、年に一度の集まりの際、各国からの主要メンバーを中心に議論を行う恒例になっている。昨年度、2014年2月に第9回目のYSRIMを韓国で迎えた際、この国際交流会議を支えてきた主要メンバー(赤司先生、李先生ほか)が集合して話し合いが行われた。その際、日中韓の3箇国がそれぞれ3回ずつ会議をホストしたこと、九州支部が2015年で50周年記念を迎えて一つの区切りとなること、同様の趣旨の国際シンポジウムや国際会議が増加していることなどを理由に、いったん、YSRIMという枠組みでの国際交流活動を総括し、新しい視点での活動の可能性を議論しよう、という結論に至ったようである。筆者である伊藤はこのコアメンバー会議に参加しておらず詳細な経緯は理解していないが、YSRIMは一定の役割を終えたというのが共通の認識であったと推察される。

### 3. YSRIMの成果

さて、筆者の個人的な理解では、このYSRIMは毎年1回開催することだけが目的ではない。もちろん、九州支部活動の実績として毎年1回のYSRIM開催は重要なアピー

ルポイントであり、担当を仰せつければ必死に資金集めと論文集めに奔走し、会議当日ともなれば深夜まで爆弾酒や白酒に付き合い…と、結構大変な思いをしながら年に1回の開催を維持してきたのも事実である。しかしながら、YSRIMがサロンであり、情報交換と人材ネットワーク構築の場であり、そのトリガーとなる仕掛けであるとするならば、その成功とは、新たな人的ネットワークの構築と、情報交換による新たな共同研究や共同調査の実施、を指すことになろう。また、人的ネットワークには、広義には人材交流の意もあり、(特に我が国の視点では)中国・韓国からの優秀な留学生の獲得、国内の優秀な人材の中国・韓国への派遣、といった点も成果となろう。

筆者の研究室(九州大学総合理工学研究院)では、YSRIMで培った教員間の友情と相互理解の深化に基づき、特に韓国から留学生を送り込んでもらったことが大きな成果と感じており、これは別の研究室(九大建築)でも同様ではなかろうか。また、学部4年生や修士1年生にとっては、比較的敷居が低く参加しやすい国際交流会議であったYSRIMは、多少、英語に自信がなくとも海外で研究発表するという経験を積むのにはよい機会となったのも事実である。会議を離れての、学生間の交流が有意義であったとも聞いている。

総括を行う際には、その成果を具体的に列挙し、定量評価することが期待される(もしくは強要される)。YSRIMとは、結局のところ、日中韓の学会支部レベルにおける草の根ネットワーク構築の努力である。筆者は得るものが大変大きかった活動と感じているが、この取組みを通じて培われた日中韓3箇国の研究者の友情と信頼の度合いを、定量化して示すことなどできるわけがなく、この点は大変残念なことである。

### 4. 国際交流としての会議継続の難しさ

筆者がYSRIMに初めて参加したのは第3回の2008年(韓国・釜山)会議である。このときから、各国参加者のモチベーションに若干の差があることを感じていた。誤解を恐れずに書くならば、日本=韓国>中国、といった関係であろうか。この傾向は回を増すごとに強くなり、昨年度の第9回YSRIM 2014の際には、中国からの参加者が激減した。この理由の一つは前述の通りである。

新たに国際交流を始めるには、多大な努力が必要である。単純な継続にも相当な負担が強いられる。しかしながら、一度始まった催し物を整理して取りやめるのは、開始するとき以上の労力が必要になる。特に、後任者が会議を取りやめる場合、その行為が前任者の否定と取られる可能性もないとはいえず、多大な精神的負担が強いられる。また、止めるためには合理的な理由も求められる。単なる縮



小均衡では許されない風潮がある。

この点では、韓国や中国から YSRIM の発展的解消を提案することは不可能であり、九州支部がイニシアチブを取る必要があった。すでに赤司先生は東大に移られていたが、九州支部長として第9回の YSRIM まで参加して下さったことが、YSRIM の活動を上手にソフトランディングさせられた要因であろう。九州支部は最後まで赤司先生のリーダーシップのもとにすべての決定を行うことができ、10年間の YSRIM の活動を成功裡に終えることができたといえる。

## おわりに

人口減少とそれに伴う経済規模の縮小を背景に、空気調和・衛生工学分野にも大きな変革が求められている。SHASE 21 世紀ビジョン<sup>3)</sup>も、そのように指摘している。産業規模や分野そのものがシュリンクしていくことを避けるために、常に派手な打ち上げ花火を上げ続け、存在をアピールすることは、もちろんある側面では重要であろう。特に、東京(都)から遠く離れた田舎(鄙)にある九州支部は、その宿命から逃れられないのかもしれない。

しかしながら、そろそろ一度、脚下照顧し、基本に立ち戻る時期ではなかろうか。

九州支部の国際交流とは、本部向けの年次報告書を華やかにするためのいいわけ作りが目的ではない。九州支部の研究者は、YSRIM を機に韓国、中国の仲間たちと Peer to Peer の強力なネットワークを構築することができている。組織としての国際交流で手に入れることができた、この個々人の信頼に基づくネットワークを駆使し、九州支部は新たな国際交流の形を展開する。組織としての協定やルーティン化した集まりはもうないけれど、自発的に国際交流が創発する土壌がある、と筆者は確信している。

さて、筆者である伊藤は、個人的にはグローバル化に否定的である。

あちこちと総花的に手を広げず、九州地域の空気調和・衛生工学エンジニアの技術力底上げ、学術団体として地域の研究レベルの底上げに、自身の持てる力と時間を集中したいと強く願う。

筆者はこれを“積極的停止状態”と勝手に名付け、結構、肯定的にとらえている。

## 参考文献

- 1) 赤司泰義：環黄海建築環境エネルギー国際交流会議 (YSRIM) について、空気調和・衛生工学, 80-11(2006-11), pp. 71~77
- 2) 赤司泰義：YSRIM(環黄海建築環境エネルギー国際交流会議)の意義と展望—開催目的・経緯・展望—空気調和・衛生工学, 83-10(2009-10), pp. 5~9
- 3) 空気調和・衛生工学会 21 世紀ビジョン ([http://www.shasej.org/topics/1205/21\\_vision%20JPN.pdf](http://www.shasej.org/topics/1205/21_vision%20JPN.pdf))

(2015 7 7 原稿受理)

## Evolutionary Re-organization of International Exchange Program of Kyushu Branch, SHASE and Prospects in the Future

Kazuhide Ito\*

**Synopsis** The Kyushu Branch of the SHASE(Society of Heating, Air-Conditioning and Sanitary Engineers of Japan)has continuously held YSRIM(Yellow Sea Rim International Exchange Meeting on Building Environment and Energy)under cooperation with The Shanghai Society Refrigeration(China)and The Yeongnam Chapter of Korea Institute of Architectural Sustainable Environment and Building Systems(South Korea)since January, 2006, and finished the 9th YSRIM in February, 2014. The Kyushu Branch of the SHASE just started the evolutionary re-organization of international exchange program and began the discussion concerning the prospects in the future. This paper reports the past, current and future of international exchange program of Kyushu Branch of SHASE.

(Received July 7, 2015)

\* IGSES, Kyushu University, Member



伊藤一秀 いかとうかずひで

昭和47年生まれ/出身地 岐阜県/最終学歴 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程 学位 博士(工学)/その他 SHASE 技術フェロー 主な業績 空気調和・衛生工学会論文賞、日本学術振興会賞、日本建築学会賞(論文)、科学技術分野の文部科学大臣表彰 若手科学者賞など